

8月25日に開幕した第45回北海道学生アメリカンフットボール選手権は、10月13日（日）の第8節、北海学園大ー北海道大（円山陸上競技場、午後1時開始）戦で、優勝校が決まる。北海学園大が勝てば2年連続7度目、北海道大が勝てば2年ぶり26度目の優勝だ。

優勝校は、全日本大学アメリカンフットボール選手権大会の東日本代表校決定戦準決勝・パインボウル（11月3日、仙台市陸上競技場）で東北学生リーグ優勝校と対戦。勝利校が、甲子園ボウルの出場権をかけて東日本代表校決定戦（12月1日、横浜スタジアム）で関東代表校と対戦する。

北海道勢悲願の甲子園ボウルへの第一歩となる道学生選手権の注目の一戦の見どころと、注目選手を紹介する。

昨年優勝の北海学園大、同2位の北海道大とも、リーグ戦はここまで4連勝。戦いぶりを振り返ると、北海学園大は4試合で総得点が241点、総失点が36点。一方の北海道大は総得点が278点で総失点が19点。北海学園大が第2戦の北星学園大戦で26ー20と苦戦したものの、そのほかはいずれも圧勝している。

チームの特徴が分かるのが獲得ヤード数を比較すると、北海学園大は4試合で1、606ヤードを獲得しているが、このうちパスが919ヤード（57.2%）と、自慢の空中戦で強さを見せる。北星学園大戦でも、残り26秒で逆転のTDパスを決めた。これに対して北海道大は総獲得1896ヤードのうちランが1、223ヤード（64.5%）で、こちらも伝統のラン攻撃が威力を発揮している。札幌大戦では4人のRBとQBが計594ヤードを走り、13個のランTDを奪った。

また守備力の目安となる喪失ヤード数は、北海学園大が715ヤード、北海道大は714ヤードでまったくの互角。守備チームが、互いの得意プレーをいかに抑え込むかも、勝敗のポイントになりそうだ。

両校の主力選手を紹介する。パスの北海学園大は、QB佐和田健悟（4年、名寄高）とWR成田将吾（4年、北海道栄高）のホットラインにまず注目だ。エースナンバー「2」を引き継いだ佐和田は4試合でリーグ最多の728ヤードを投げ、12TDを量産。主将も務める成田は317ヤードをキャッチするリーディングレシーバーで、6TDを挙げている。北星学園大戦で殊勲の逆転TDパスをキャッチしたWR佐藤怜太（2年、札幌光星高）や、1年生ながらパス成績でリーグ4位の寺川隆吾（北海高）などレシーバー陣は多彩だ。RB丸山哲央（4年、旭川実業高）の力強いダイブ攻撃も魅力だ。

守備ではDLの北村大紘（4年、北海道栄高）と坂本大弥（3年、札幌開成高）、守備リーダーのLB中里瑞己（4年、旭川西高）、DB福永竜也（4年、室蘭清水丘高）らが中心。パスインターセプションを2本ずつ決め、ともにTDも奪っている永井峻（3年、札幌光星高）と松浦理温（1年、石狩南高）のDBコンビも注目だ。

一方、北海道大は4試合でリーグ最多の724ヤードを走り、11TDを挙げている荒山赳（4年、東京・麻布高）の走りから目が離せない。巧みなカットバックとボディバランスは見ごたえ十分。RB陣は中牟田晃基（3年、埼玉・浦和高）もリーグ4位の306ヤード、9TD、ダイブに強い手塚雅斗（2年、栃木・佐野高）も249ヤード、5TDと持ち駒は豊富だ。ラン攻撃に隠れがちだが、効果的なパス攻撃も武器だ。高校時代の経験とパスセンスの良さ、恵まれた体格で開幕戦から先発起用される1年生QB茨木大輔（兵庫・六甲学院高）は、RB陣を生かすショートパスで確実にヤードを稼ぎ、攻撃の幅を広げている。キッキングチームも強力だ。DB天内太生（4年、大麻高）は帯広畜産大戦で2本のキックオフリターンTDを決め、RB荒山も札幌学院大戦で90ヤードのキックオフリターンTDを奪った。

守備チームは動きの良いLB陣が中心。主将も務める百瀬皓太（4年、兵庫・報徳学園高）と森川紘輝（4年、札幌南高）、稲吉雄大（3年、札幌・北嶺高）らが、守備ラインと関係しながらハードタックルを見せる。